臨床発達心理士会千葉支部

News Letter ちば

2017年12月30日 第11巻2号 発行元 日本臨床発達心理士会千葉支部

目次

1. 巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・1
2. 2017年度第3回研修会のお知らせ・2
3. 2016年度第2回研修会報告・・・・3
4. 地域研修会報告・・・・・・・・・・6
5. 事務局だより・・・・・・・・・・・7

巻頭言

福田　和司

「特別支援学校の生徒たちと選挙について考える」～社会の一員となるために～

私の勤務校は、普通科と専門学科併設の知的障害特別支援学校（高等部単独）である。専門学科3年生の5月の社会科で、選挙についての授業を行った。日本の選挙の歴史、投票する意義や生活とのつながりについて説明し、デジタル教材「NHK for school『選挙ってなんのため？』」の中高校生のインタビューを聞いた。その後、生徒たちに二つの質問をしてみた。

一つ目の質問は「選挙って何のためにあるの？」

回答には、社会の一員になる・よりよい国にする・偉い人を決める・自分が暮らしやすい社会をつくる・自分の意見に合う人を代表にする・国民が政治に参加する・意見を反映する・政治への関心を高める、などがあった。

二つ目は「選挙によって変わること、変えてほしいことは？」

これには、平和な国になる・首相や知事などが代わる・ブラック企業を減らす・保育園を増やす・主婦が社会復帰しやすい世の中にしてほしい・物価の値下げ…と、色々な意見が出た。それぞれが世の中の情勢について理解し、よく考えられていたことには驚いた。

2015年の改正公職選挙法の成立により18歳以上に選挙権が与えられ、2016年6月から施行された。2017年10月22日には衆議院解散総選挙が行われ、18歳以上の生徒は投票に行く機会を得た。ある生徒は、「○○党は、○○だから投票しない」「○○さんは、こういう政策だからいい」など関心が高く、また、ある生徒はだれに投票するかは決めたが、選挙に行くかは初めてなので不安があり、悩んでいた。担任に相談をし、結局投票できたのだがとても緊張したようだ。その時行く決め手になったのは、5月の「選挙ってなんのため？」の授業だった。

12月現在、企業に内定をもらった生徒もいる。3年生は皆、3月には巣立って行く。広く社会に目を向け、その中の一員であるという自覚を持って成長してくれることを願っている。

2017 年度第 3 回千葉支部研修会

2018 年 2 月 4 日 （日）

９時３０分～１２時３０分　９時より受付

I. 事例検討

具体的な事例(仮想事例)についての報告と討議、講師コメント

II. 講演（90 分）

テーマ　「WISC-Ⅳを活用したアセスメントと支援」

－事例検討および、検査結果のフィードバックと報告書作成を中心に－

講師　大六一志　先生

《概要》

千葉支部では、これまでの研修会において事例検討を積極的に行い、子どもの的確なアセスメンの方法と、正しい子ども理解に基づいた支援方法のあり方について、講演、事例報告、事例にもとづく演習などの形で研修してきた。また、昨年度の第 3 回資格更新研修会では、大六一志先生に講演していただき、WISC-Ⅳ知能検査について、合成得点の解釈と支援法を中心に研修した。

本研修会は、昨年度に引き続き大六一志先生をお招きし、WISC-Ⅳ知能検査を活用したアセスメントについて、前半は具体的な事例(仮想事例)についての検討を行う。後半は、検査結果を活用したアセスメントを子どもの支援に生かすための、検査結果のフィードバックと報告書作成についてのポイントや留意すべきこと等を中心に、大六先生に講演していただく。

昨年度の研修会に引き続き本研修会をとおして、WISC-Ⅳ知能検査を活用したアセスメントの実際と、特別な支援を必要としている子どもたちへの支援に生かすための方法について、参加者の皆様とともにさらに深めたい。

【会場】　**千葉大学西千葉キャンパス**(教育学部　1号館1階大会議室)

千葉市稲毛区弥生町 1-33

JR西千葉駅より徒歩8分　京成みどり台駅より徒歩7分

学内への車の乗り入れはできません。必ず正門よりお入りください。

【参加費】　**各部 1000 円**

- ◆ 研修ポイント　１ポイント
- ◆ 当日受付で集金します。

【参加方法】

有資格者向けの研修会で定員 135 名、他支部からの参加も可。<u>事前参加申し込みが必要</u>です。

―――――――――――――――――――申し込み受付開始―――――――――――――――――――

千葉支部会員－2017 年 12 月 1 日より。　他支部会員－2018 年 1 月 1 日より。

氏名、支部名、登録番号を必ず明記の上、

jacdpchiba@yahoo.co.jp　宛てにメールで送信してください。

参加の可否について返信します。なお、定員になり次第、締め切りといたします。

2017 年度　第２回　資格更新研修会報告

■開催日　２０１７年１０月２２日（日）

■会場　千葉大学西千葉キャンパス

午前の部①　9:30～11:00

テーマ　「子どもの今までと今とこれからをつなぐ」
―障害のある子にかかわる諸計画について―
講師　広瀬由紀先生（植草学園大学）

保育現場で特別支援を要する子どもが増加傾向にある中で、それをどのように支えていくかを豊富な事例を入れながらお話していただいた。

平成 29 年には幼稚園指導要領・保育所保育指針が改正され、双方で個別支援計画の立案を明示されている中、具体的にどのような指導内容・書式で作成するかは各園、あるいは各自治体に任されているのが実態である。個別支援計画の本来の役割を確認しつつ、どのような取り組みが行われているか、数カ所の自治体を比較しながらシステムの違いや内容の違いも知ることができた。また、個別支援計画を立てる上で大切な情報となり得る、サポートファイルも各自治体各自のネーミング、作成母体、その主眼としている内容も各々であることがわかった。

個別の支援が必要な子どもたちへの支援体制や支援者も各自治体の取り組みに任されている中で、小学校では配置が一般的になってきた通級教室のような存在を幼稚園で実際に置く画期的な取り組みで常勤者を配置している自治体もあることを知った。特別支援経験者も含め支援員と言う補助的な立場が多い中、このような取り組みは幼児教育でも広がって欲しいと感じた。

また、園と医療や特別支援教育者など多職種での連携することは「同じ場面を見ているが見えているものがちがう」ため、お互いがどのように見えているか「意識すること」「知ること」は対象児へのかかわりを進めていく上で大切であるとおっしゃっていたことが印象的である。園では保育の方向性や他児との関係性など、対象児への視点だけでは解決が難しく「問題は複合的に絡んでいる」ため、保育者の立場や考え方を理解した上での話し合いがのぞまれるとのことであった。また、園では多様性を認めての保育「インクルーシブ教育システム」の導入が一般的になってはいるが、保育者の理解や価値観も様々で対象児が問題児として扱われることもある。その中で、専門家に意見を求めるだけではなく、子どもたちの考えを活かして、対象児の強みを引き出す支援につなげている事例も紹介され、普段クラスの子どもたち関係を作れる保育者だからこそできる支援方法であると感じた。

広瀬先生からの保育者が「『見方』を変えて『味方』になる」ようなお手伝いが心理士として、実践していきたいと思った。　（松川節理子）

午前の部②　11:10～12:30

テーマ　保育現場への支援―個別支援計画作成と巡回相談を通して―
巡回相談における助言と指導―支援員に向けた手作りガイド資料の活用―
講師　水谷由里子先生（台東区松が谷福祉会館）

東京都台東区にある松が谷福祉会館で担当されている巡回相談事業について豊富な体験を基にたくさんの事例を紹介していただいた。

はじめに巡回相談の流れや方法（時間・回数・カンファレンス・事前相談等）をお話しいただいた後、巡回時の観察の視点やその後どのように伝え今後につなげていくかなど、細かくお話しいただいた。

観察では、本人・関わる大人・環境・その他それぞれの細かな視点からどのようなことが読み取れるか整理された資料を基に事例をあげながらお話しいただいた。また、伝える場面では、読み取れることを非難や指摘するのではなく、子どもにとって活かせる支援方法を探ることを念頭に置き、集団を考慮した実践に基づいた複数の具体的な提案をすることで、選択肢を作ること、また、その選択肢も誰が実践するかで結果が変わるため柔軟な対応が求められることがわかった。普段かかわっていなければわからない事柄や視点がある一方、巡回者だからこそ見える新しい視点の提供に努め、相談者と巡回者は上下ではなく横並びの関係として、立場の違いからそれぞれの視点を尊重し情報を提供し合える関係に努める姿勢が印象的であった。

後半は言葉だけではなく具体的なかかわり方を状況や事例によって図で作成したものを見せていただいた。言葉だけでは人によって捉え方も様々であったり、イメージできなかったりする状況や方法を非常にわかりやすく示してあり、子どもだけではなく大人にも視覚支援は有効であり、巡回にもこのような工夫が求められることを考えさせられた。

（松川節理子）

午後の部②　13：30～16：30

講演　こころをラクにあたまをクリアに
講師　大林 泉先生（臨床心理士）

大林先生は、自閉症の息子さんを育てる時の周囲との関わりから保護者特にお母さんの気持ちを語られた。親を支えることを大事にしてほしいという願いがひしひしと伝わってきた。またご自身がデイサービスを立ち上げた時に比べて制度は充実しつつある。１０年で大きく変わってきたと感じているとおっしゃっていた。制度が整い、早期発見早期療育が叫ばれているが、支援者が心しなければならないことが多くあった。

障害の告知を受けてからの心の動きは、衝撃・否認・努力・抑うつ・受容の過程をたどるとされている。受容は、あきらめや慣れ・力がぬけるという方があっている。また衝撃から抑うつの間を

行きつ戻りつする母親の心境を細かに語られた。

ばくぜんとした不安から将来の見通せない辛さ・自責の念・「こんな子はいらない。」と叫びそうになる時・嫉妬・健診での心の傷・診断の衝撃・否認・悲しみ・孤立・療育に行って努力するとき・それから少しずつ周囲にありのままに話す時を経て自分なりの考えを持つようになる。苦しい母親の気持ちを「こころをラクにあたまをクリアに」（ぶどう社２００３）から引用され話された。この著書は母親達の気持ちを綴った文章を集めた「ことの葉通信」が元になっている。同じ悩みをもつママ友が救いとなった経験を語られた。

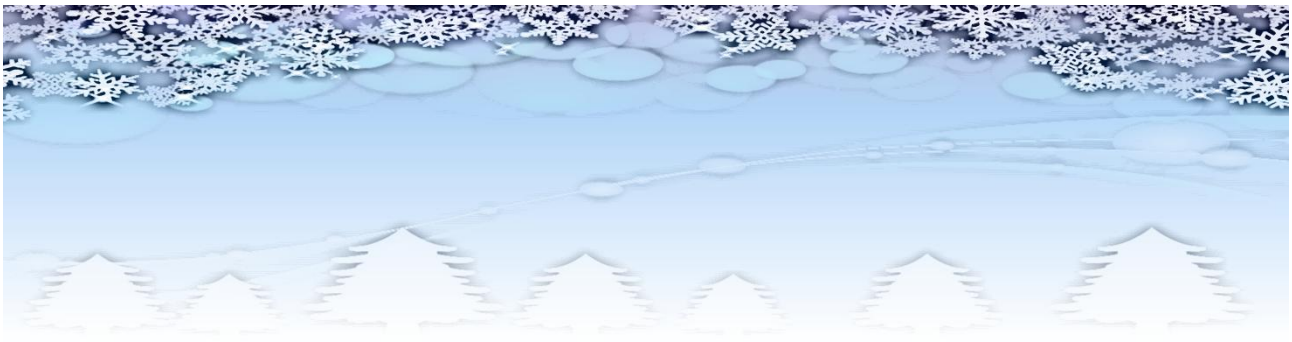
支援の仕事を始め，支援者と母親の両方の気持ちを体験されて「人生はままならないが子どもがいなかったら傲慢であっただろう。」と今の心境を語られた。

子どもへの支援は大事であるが、親だって大事。親である母親の気持ちを理解することの重要性を話された。親は外で優しくされると家で子どもにやさしくできるし、その逆もある。正しいことを言うことが正しいわけではない。支援にあたり、心がけてほしいこととして以下のことをのべられた。

① 主訴をきちんと聞く。
② 語られない主訴も想像して聞く。
③ 家庭での親子の雰囲気をつかむ。
④ 障害を受け入れられるようにという目標はたてない。少しでも楽になるためのできることを探す。
⑤ 否認は、安全に着陸するための「逆噴射」である。否認を否定しない。なにがあっても毎日食べさせ風呂に入れ寝かしつけるという日常生活はある。それだけでも大変なことである。
⑥ 「相談をし、療育に行くのがふつう」と思わない。
どんなところかわからなくて気が進まなかったり子どもどころでない場合もある。
⑦ 療育に行かせれば支援がすみと思わない。
過密スケジュールを組んでしまったり他の兄弟の世話ができなかったりすることもある。療育のための生活にならないようにする。できたら喜び、できなければ人に支えてもらえばいい。
⑧ 親を支えること。
⑨ 助言は助言が入る余裕を作ってからする。
できていることに光をあて、メニューを複数用意し選択できるようにする。

最後に家族も努力するが、社会を変える視点ももってほしい。誰もが生活を楽しめる社会に変わってほしいと話された。支援するということの幅の広さ深さそして支援にあたり人間観・人生観・社会観を深めることの重要性を痛感した。

（小田島和枝）



地域研修会報告ー東総地域研修会ー

■日時＊2017 年 11 月 25 日（土）13:30～16:30
■会場＊東金市ふれあいセンター　■参加者 9 名

テーマ：「交流分析とエゴグラムの活用」
講師：鈴木　泉　氏（千葉県スクールカウンセラースーパーバイザー）

【概要】

今回の東上総地域研修会では、交流分析とエゴグラムを取り上げ、交流分析の考え方やエゴグラムの体験をとおして、自身のコミュニケーションスキルの特徴を知り、スーパービジョンやディスカッション、コンサルテーション等における相談者と臨床発達心理士の間の適切なコミュニケーションスキルについて考えてみることにしました。

交流分析はエリック・バーンが、フロイトの理論をより実用的に使えるようにと考え出したものです。交流分析では、自我状態として３つの部分（ＰＡＣモデル）を考えます。一つは「親の自分（Ｐａｒｅｎｔ：Ｐ）・・幼い頃から親に教えられた態度や行動をとる」、二つ目は「大人の自分（Ａｄｕｌｔ：Ａ）・・事実に基づいて物事を判断する理性的な部分」、三つ目は「子どもの自分（Ｃｈｉｌｄ：Ｃ）・・子どもの心、本能や感情そのままの部分」です。交流分析では、人と人とのやりとり（交流）が、お互いがどのような自我状態のやりとりになっているかを、①相補的なやりとり、②交叉的なやりとり、③隠されたやりとりの三つに分類して考えます。研修では、よくある会話などの事例がどのようなやりとりになっているかを参加者で考えてみました。実際の相談やディスカッションなどでは、相補的なやりとりだけでは特に問題も起こらず関係性も変化がないことも多くあるので、あえて交叉的なやりとりをとりいれ、最終的にＡ　ｔｏ　Ａの落ち着いた関係性を築くことにより問題の改善を図っていくという方法を取るという講師のお話がありました。

エゴグラムでは、自我状態を、ＰＡＣモデルをもとに、さらに、ＣＰ（Ｃｒｉｔｉｃａｌ　Ｐａｒｅｎｔ）、ＮＰ（Ｎｕｒｔｕｒｉｎｇ　Ｐａｒｅｎｔ）、Ａ（Ａｄｕｌｔ）、ＡＣ（Ａｄａｐｔｅｄ　Ｃｈｉｌｄ）、ＦＣ（Ｆｒｅｅ　Ｃｈｉｌｄ）の五つに分類し、この自我状態の間に流れている心的エネルギーの量をグラフ化してみようと考え出されたものです。日本ではＴＥＧというエゴグラム検査（質問紙）があり、研修では、この検査を参加者で実際にやってみました。講師から、エゴグラムの主なパターンの解説があり、このパターンから自身の結果を分析してみたり、実際の事例から具体的な対応を考えてみたりする演習も行いました。

エゴグラムは固定的なものではなく、様々な経験やその時々の状況によって変化するものであるということ、中学生、高校生から実施できるもので自分を見つめるツールにもなるという講師のお話もありました。

難しい部分もありましたが、あまり研修する機会のない交流分析やエゴグラムに触れることができました。人数は多くなかったのですが、講師の先生との関係も深まり、楽しい研修会になりました。

（渡邉　亮一）

事務局だより

○研修会の受付について

本年度の 2 回の研修会が終わりました。2 回とも、ありがたいことに多くの方が参加してくださいました。また、参加者のうちほぼ 3 分の 1 は他支部の方でした。

このように参加者数が増えていることと、今年度から当日の受付が「会員情報管理システム SOLTI」を使用してバーコード読み取りによるオンラインで行うようになったことに伴い、気をつけなくてはいけないことも出てきました。

研修会の時点で 2017 年度の会費が滞納中の場合、受付時のバーコード読み取りでそのことが表示され、受付にて研修会に参加していただいてもポイントの付与がされないということをお伝えしなくてはならない事態となってしまいます。

そのようなことのないように、事前参加申し込みをしていただく研修会については、メールでの申込時に SOLTI にてチェックして事前にお伝えできるようにしたいと考えておりますが、会員の皆様においても確認をしていただきますようお願いいたします。

○資格更新ポイントの管理について

繰り返しになりますが、資格更新ポイントの管理についてお知らせいたします。

2017 年度より資格更新ポイントの管理方法が変わり、ポイントの管理は「会員情報管理システム SOLTI」にて各自で行うことになりました。また、5 年ごとの資格更新も SOLTI により Web 上で行うようになりました。

詳しくは、本部事務局より皆様に郵送された「臨床発達心理士資格更新ポイント管理の移行について」のマニュアル、または、日本臨床発達心理士会オフィシャルサイトの「臨床発達心理士の方へ」→「資格更新」に掲載されているマニュアルでご確認ください。

このことに伴い、今後、資格更新研修会で参加記録ノートは使用いたしません。ポイントの付与は ID カードをバーコードで読み込んで行います。研修会に参加する際、ID カードを忘れないようにご注意ください。

また、研修会のときに参加記録ノートは使用しませんが、資格更新手続きの際には必要となりますので、くれぐれも紛失されないようにご注意ください。

○千葉支部事務局から会員の皆様への連絡について

千葉支部会員の皆様への連絡は、本ニューズレターと、支部ホームページへの掲載、支部会員への一斉メールの送付にて行っています。

千葉支部会員あての一斉メールは、日本臨床発達心理士会・会員情報システムＳＯＬＴＩにより送付しております。このメールについて、いくつかのメールサービスでは、「なりすましメールの可能性がある 」との警告が表示されたり、迷惑メールとみなされたりすることがあります。千葉支部からのメールが迷惑メールとみなされて振り分けられていないか確認をしてください。

編　集　後　記

先日、ふたご座流星群を観察しました。見事な星の流れに自然の偉大さに感激しました。

今年も残すところ数日となりました。この 1 年を振り返り、目標を達成することができたのだろうかと改めて考えてみました。会員の皆様はいかがですか。（　S&M　）